

秋を代表する花のひとつであるコスモスは「秋桜」と書く。文字通り桜のように美しいコスモスであるが、秋に桜の花を目撃したことのある人もいるだろう。

この時期に桜が花を咲かせるのは、葉が落ちてしまった桜の木という共通点がある。通常なら、開花後の桜は緑色の葉で覆われ、秋の深まりとともに、その葉が赤や黄色に色づき始める時期だが、葉がほとんどついていない桜の木を見受けることがある。実は、季節はずれの桜の開花には、この「葉っぱ」の状態が重要な鍵を担っているのである。

桜は本来、夏の間には翌春の花芽を作ってから休眠に入る。このとき花芽には、葉でつくられて花芽に届く「休眠(成長抑制)ホルモン」によって、咲くことを「待て」の状態にされている。葉が落ち、冬の寒さから目覚め、次第に春の暖かさを感じて、つぼみが成長して開花を迎えるというサイクルにある。

ところが、夏に何かの原因で葉が落ちてしまうと、①継続的に花芽に届けられる休眠ホルモンが十分に届かなくなってしまう。そして夏の終わりを告げる涼しさを冬と間違えて、②その後再び気温が高くなると「あ！春が来た」と勘違いしてしまい、開花までのサイクルが早まって、秋に花を咲かせることになる。この2つの条件下で生じるようだ。

この季節はずれの開花は「不時現象」として气象台でも記録をとっているそうである。

葉が強風などで引き剥がされたり、害虫や天候不順で枯れ落ちてしまったり、この現象の原因は様々である。時に暴風に伴う塩害などによることもあるようだ。

一本の木の一部分で早咲きしてしまった桜は春には咲かないが、その木のほかの部分の花芽は、休眠ホルモンが少ないながら冬を越して、春には花を咲かせることになる。

(日経新聞掲載：気象予報士伊藤みゆきさんより抜粋)

桜はもともと秋に咲く植物だったとの説もある。(東京農業大学の主張)

元は秋だったのにある理由によって、春に咲くようになった。厳しい環境へ移動していく中で生き残るために眠ることを覚え、春に咲くようになった。植物の進化を遺伝子レベルで解明していく農学の知見として。

日本の桜とネパールの桜(ヒマラヤザクラ)は遺伝的に非常に近い関係にあることがわかった。温室育ちのネパールの桜は中国や日本に北上していく過程で、環境を乗り切る手立てとして冬場に葉を落として活動をとめる「休眠」を得た。動物の「冬眠」に匹敵する。

日本で秋咲きの桜が見られるのも、「狂い咲き」などではなく、「先祖がえり」による可能性が高いという。

桜の花芽は夏にほぼ出きているので秋の初めに葉をきれいにむしり取ってしまえば、人工的に狂い咲きさせることも可能になるそうだ。

以上